

序・日本人移住史

本書は、大変にユニークな本です。

56名の執筆者が、71編に及ぶ寄稿をされました。殆どの方が、普段は文筆と全く関係のない生活をされています。

オーストラリアに最初に現れた日本人は、慶応3年(1867)にメルボルンのプリンセス劇場で公演した12人の日本人曲芸団「大ドラゴン一座」ということですから、日本人とオーストラリアの間わりは、130年以上に及ぶこととなります。この本では、この長い歴史の節目節目に、オーストラリアの大地で日本人が何をし、又、何をされたか、その現場にいた体験者本人に書いて頂きました。既に亡くなられた方の場合は、出来るだけ近い関係者にお願いをしました。この本は、体験者でなければ知ることの出来ないエピソードに溢れています。読みやすいように一応は年代順に配置してありますが、興味のあるところから読んで頂いて結構です。各編は独立していて、最初から読まないといけないということはありません。

明治時代、最初の大規模な日本人のオーストラリア入国は、木曜島の真珠貝採取ダイバーでした。卓越した潜水技術で日本人の名を高めた作業の実際の様子を、城谷さんが、戦時中の収容所時代と併せて、書いて下さいました。今は既に忘れられかけている、クイーンズランド州の砂糖黍産業に従事した日本人労働者。村上雄一さんは、希少な資料から、彼らの業績を掘り起こされています。110年前、日本人による最初の貿易会社「濠洲貿易兼松房治郎商店」を創立した兼松房治郎が、初めてオーストラリアの地を踏みました。今世紀に入ると、愛媛県選出、帝国議会議員であった高須賀穰が家族を伴って移住し、米作りに挑戦。現在日本にも輸出されている、オーストラリア産ジャポニカ種の礎を作りました。兼松房治郎については、兼松OBの曾野豪夫氏に、高須賀穰については、日本人移住者研究の第一人者で、既にオーストラリア国立大学をリタイアされたデビッド・シソズ氏に執筆して頂きました。

第一次大戦が始まると、日本は日英協定に基づいて英国側につき、海軍力の手薄なオーストラリアをドイツ海軍の攻撃から守る為に、軍艦を派遣しました。巡洋艦「矢矧」の宮治民三郎艦長を父に持つローレンス宮治常子さんに、父の思い出として当時の様子を書いて頂きました。アンザック軍をエジプト迄護衛した日本軍艦「伊吹」や、地中海でオーストラリア兵を含む75万の兵員護送に当たった日本海軍駆逐艦隊の活躍が伝えられ、オーストラリアは最も日本に友好な国となりました。

第二次大戦。日本は一転してオーストラリアの敵国として対峙することになりました。オーストラリアの表玄関、ラバウル、ガダルカナル、珊瑚海、パプア・ニューギニアは、今も記憶に残る激戦地です。ダーウィンやタウンズビル等、北部各地は日本海軍機の爆撃に晒され、シドニーは特殊潜航艇の攻撃、艦砲射撃に脅かされました。輸送船団爆撃飛行で撃墜され、捕虜としてカウラに収容された高原希国氏は、戦後再びカウラを訪れ、今昔の思いを綴ってくれました。オーストラリアやニューギニア、ニューカレドニア等に住んでいた日本人は、全員オーストラリアのアウトバックに作られた4ヵ所の収容所に強制収容されました。木曜島生まれのエブリン鈴木さん、ブルーム生まれの三瀬幸次郎さん、オリエル鳥丸さん、収容所の監視兵ジェームズ・サリバンさんが、夫々の体験をしたためてくれました。

戦争が終わると、収容所の日本人は一部の例外を除いて日本へ強制送還となり、オーストラリ

アの日本人は無限にゼロに近い状態になりました。日本軍による捕虜虐待の様子が帰還兵から伝えられると、オーストラリアは反日世論に燃え上がります。世界で最も反日感情の強い国になってしまいました。こうした中、1952年、日本駐留軍人ゴードン・パーカー氏と結婚したチェリー・パーカーさんが、日本人の入国を認めていなかったオーストラリアに、ご主人の努力によってようやく入国を果たします。これを突破口に、約800人のいわゆる戦争花嫁さんが、後に続きました。戦後日本人移住のパイオニアとなったこれらの人達は、苦しみに耐えながら、良き妻、良き主婦、良き母としての高い評価を得て、日本人に対する理解は徐々に広まっていきました。1956年、メルボルン・オリンピックで活躍する日本人選手を目のあたりに見て、反日感情は更に改善されていきます。1957年、日豪通商協定調印(岸信介首相)。オーストラリアで次々と開発された資源を元に、日本は戦後復興から経済発展の波に乗り、いわゆる日豪経済補完関係が確立されていきます。1975年、人種差別禁止法(ゴー・ウィットラム首相)、1976年、日豪友好協力基本条約調印(NARA条約、三木武夫首相)。1980年代に入ると、日本人技術者、芸術家、ビジネス移住者が永住ビザを得て入国するようになり、日本人の人口が急速に増えて来ました。現在は定住者、駐在員を含めて、全国で約2万人を数えます。最近では、ワーキングホリデーでオーストラリアを訪れる日本の若者が、オーストラリア人と結婚して定着するケースが目立っています。

この記念誌は、1996年にシドニーで開催された全豪日本クラブ役員会で、佐藤寿治会長(当時シドニー日本クラブ事務局長)の提案から始まりました。日本の18倍もあるこの国でどうやって記事を集めるか、各州にある日本クラブの協力が必要でした。クイーンズランド州の寺田満春総務、ビクトリア州の吉澤通明元会長、西オーストラリア州の中原武志元会長には、寄稿者の掘り起こしから、最後の校正手配までお世話になりました。

大勢の執筆者は勿論のこと、その大量の原稿をコンピュータ・データにするため、その入力作業をしてくれたボランティアの、岡村礼子、鹿沼知恵、北村悦子、庄島美香、長谷川潔、平田まゆみ、谷戸啓子の皆さん、ありがとうございました。仲間内とはいえ、素人の編集委員を相手に終始黙々と作業を進めてくれた、水越有史郎編集委員、これらの皆さんの協力がなければ、この本はいつになったら出版できたことやら。一文無しの企画に、快く支援金を出して下さった在豪日本大使館、寄金の呼びかけに応じて下さった多くの企業、個人の皆さん、ありがとうございました。皆さんのお陰で、一世紀に及ぶ貴重な日本人の記録が次の世代に伝えられ、日豪友好は盤石のものになります。

巻末に、日本人交流年表を掲載してあります。一通り目を通されると、各時代の流れをつかむことができるでしょう。前口上はこれくらいにします。

では、どうぞ本文をお楽しみ下さい。

記念誌統括コーディネーター、保坂佳秀
(1998年4月)

日本人移住史関係地図

